

日本を愛した

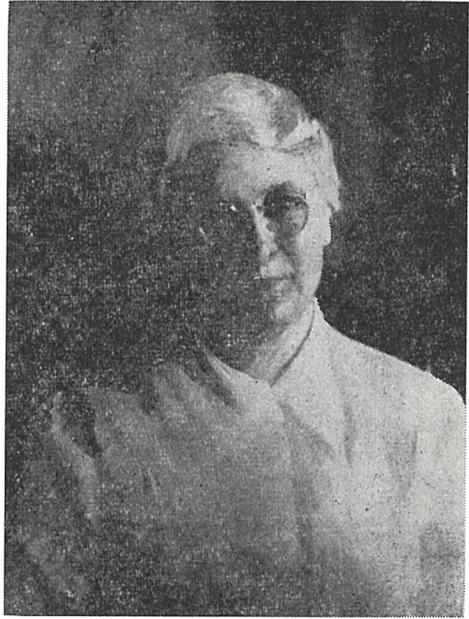
バートレット夫人

進藤 竹次郎

七月三日附の新聞紙は、元同志社大学女子
学生主任サミュエル・O・バートレット夫人
が六月三十日、アメリカ・バーモント州ノー
ウィッチの自宅で八十九才の高齢で老衰のた
め他界されたことを報じている。現在では夫
人について知っている人はきわめて少ないと
思うが、夫人一家がいかに日本を愛し、日本の

文化、日米交友のための陰の力となって貢献
されたかは、日本人に記憶されてよいと思う。
私はバートレット夫人とは全く未知未見で
あるが、終戦後まもない一九五〇年の冬、ア
メリカ旅行中、たまたま同志社時代夫君パー
トレット博士に師事し、且つ同家に親近して
いた同行のT君から、夫人は、遠く明治五年

西洋医学をもたらして来日、大阪川口に居を
トして、医療と布教に従事、一面新島襄氏と親
交を結び、同志社の創設に尽瘁されたM・L
・ゴルドン博士の長女として出生、明治二十
七年当時同志社に教鞭をとっておられた青年
学徒サミュエル・O・バートレット博士と結ば
れ、爾来夫君と共に永く山陰地方や北海道方
面の教化に奔命、昭和十一年博士が停年とな
つて故郷ノーウィッチに帰られた後も、一家
は常に思いを日本に寄せ、博士が晩年死の床
につくや、「人間というものは同時に二つの
国家を愛し得ることをいま体得した、自分は、
合衆国市民としてもよりアメリカを愛する
が、同時に日本をも愛する。臨終のときには
日米両国旗を胸の上に置いてもらいたい」と
遺言して昇天されたことや、また夫人が日米
開戦と聞くと、日米交友に捧げた八十年のわ
が事終われりと、一度は沈んだ悲嘆のどん底
から立ち上がった、周囲から冷たい眼を浴び
ながらも、老齢にむちうち一家を率いて西海
岸まで足を運び、日本人のキャンプを歴訪、
前途への絶望感に自棄自暴に陥ろうとする一
世や二世を慰め励まし、導くために献身され
たという事実を聞き、深く感銘を受けた私は、



僭越(せんえつ)ではあるがひとりの日本人として、どうしても敬意を表さねばならぬという衝動にかられ、ボストンから吹雪の中を汽車で五時間、非礼な不意の客としてノーウイッチを訪れたのであった。

それから八年、一九五八年秋、令息のダートマス大学教授ドナルド・バートレット氏が在日アメリカ大使館の文化官として赴任してこられ、二年間寧日なく日米文化交流のため努められたのであるが、教授が日本に来て意

教授の熱意が財界、学界に通じ、任滿ちた教授の帰国後昨年夏、財団法人アメリカ研究振興会あてに小切手入りの封書が届けられた。そして、同封の教授の手紙にはこうしるされてある。

「同封の小切手は、母に代わり私の妹が署名したものです。かねがねアメリカ研究振興会の企てにつつましい形式で加わりたいと申しておった母の意思を表わすものです。母は自分で署名したいと希望していた

外に感じたことは、日本におけるアメリカへの認識が広くはあるが案外浅いということであり、日米の政治、経済、文化のより深い結びつきのためには、もっと掘り下げたアメリカ研究が必要ではないか、日本の民間人による研究機関の設立ということが教授の悲願であった。その

のですが、もはや体力が許しません。それで妹が母を代行する法的措置をとりました。それゆえ、この小切手は振興会に対する母自身の贈り物なのです。母と幾度となく語り合ってきた私は、母が生涯の関心のしるしを振興会に対する贈り物という形で表わそうとした気持がよくわかるような気がします」

と、そしてまた「アメリカ研究振興会設立にあたって、日本人びとが抱かれた目的は、ちょうど彼女が両国の人間関係のために注いだ目的と全く同じように重要なものであると母は感じたいようであります」と。

父祖三代伝え、日本に對する深い愛情を以てその文化や日米交友推進の陰の力となり、今九十年の生涯の幕を静かに閉じられた老夫人の靈に對し、深い感謝の念をこめて哀悼の意を表したい。
(東洋紡績前会長)